

## 本学卒業生が青年海外協力隊の経験を後輩に伝える

～今年も JICA 出前講座を活用して～

7月5日の「産業動物獣医総合臨床」で講師を務めた芝さんは、卒業後沖縄の牧場で酪農について実習し、青年海外協力隊（以下、協力隊）に応募しました。応募のきっかけは、自分が学んできたことを人のために生かしたかったとのことですが、大学の研究室の先生が元協力隊員でその経験を日頃から聞いていた事にも影響を受け、協力隊に参加されました。

フィリピン南部のボホール島の国家酪農局ウバイ酪農牧場で、「生乳の質・量の向上」のため活動され、飼料不足、水不足、乳房炎（出荷できる生乳が少ない）、食品衛生（出荷しても傷んでいる）などの課題があることが解り、飼料作り、乳質検査、衛生環境の見直し、乳製品開発などの取り組みを行い一定の成果を挙げられました。帰国後は協力隊の経験を生かし、酪農関連の会社に就職され現在は北海道で仕事をしておられます。

フィリピンは、貧富の差の大きい国ですが、人々はフレンドリーで親切だと感じたそうです。また、フィリピンでの経験から、食べ物をつくる（食料自給）大切さを知り、日本の食品の質の高さや安全・安心に食べられることは外国から見て大きな魅力であると感じたとも話されました。

7月9日の「フレッシュャーズセミナー」で講師を務めた藤本さんは、卒業したら「砂漠か世界一高い山に登りたい、色んな国に行ってみたい」という思いから出かけたネパールで、JICA 専門家と出会い協力隊のことを知りました。帰国後、仕事に就かないまま協力隊に応募したそうです。

派遣先のコスタリカでは、国家保全地域機構で国の北部を管轄するグアナカステ保護区域生物教育部門に配属され、次のような活動をされました。

1. 近隣の小学生（4年生～6年生）に国立公園で生物教育する
2. 指導案の作成及び改定、マテリアルの補強
3. コンポストの内容を含む環境教育の巡回型の授業
4. 国立公園内の廃棄物の適切な処理方法

帰国後は再びスペイン、モロッコなどを旅行し、砂漠を見るという夢も実現し、今までの経験を生かして今後の進路を模索中とのことでした。

お二人とも、赴任当初は日本の生活や習慣との違いに驚いたり、言葉に苦勞をしたり、少しホームシックにかかったりということはあったようですが、現地の人たちとの交流を通じて、人々の優しさ、親切にも触れ、美味しい現地の食事、日々の生活を楽しめるようになり、任務を全うすると共に色々なことを学んで帰国されました。

学生達の感想には、「世界で活動するボランティアの話ということで新鮮だった。企業に

勤めるということに捕らわれていたが、弱い人の為になるという道も良いなと思った。」「青年海外協力隊は本当にいろいろな活動をしているのだと知った。自分も海外に行って視野を広げたいと思った。」「今回の話を聞いて、将来の進路の幅が少し広がった。」「海外で活動するのは日本でよりも難しいと思うけど、日本で出来ない経験がたくさん出来ると思いました。青年海外協力隊の話はとても面白く生き生きしているように見えました。私も「貴重な財産」（青年海外協力隊の経験についての評価）と言えるような仕事をしたいと思いました。」「自分の足で海外に出てみて、そこで自分の持っている知識や技術が活かsetたら良いなと思った。海外に出ることに興味があるので、今日の話をも自分の人生に役立てられればと思いました。」「自分が勉強している分野は幅広い人に役立つ学問だと思うので、世界にはこんな人たちがいるのだという意識を持って、これからも一生懸命勉強したいと力が入りました。」など、話の内容を理解するだけでなく、先輩達の経験を自分の将来に重ね合わせる様な意見も見られました。

1998年（平成10年）～2017年9月までに、本学卒業生32人が協力隊に参加し、現在も2人が活動中です。派遣職種は食品衛生、エイズ対策、感染症対策、環境教育、理数科教師、生態調査、臨床検査技師、獣医師、家畜衛生、家畜飼育と多岐にわたっています。講義を聴いた学生の中から、国際協力や協力隊に関心を持ち、将来の進路の一つとして芝さんや藤本さんに続く人が出てくれば心強いと思います。